



SASAKAWA USA
Sasakawa Peace Foundation USA

Operation TOMODACHI: A Ten-Year Commemoration

東日本大震災と「トモダチ作戦」

折木良一第3代統合幕僚長

皆さん、おはようございます。今日は、在米国日本大使館と米国笹川の共催による日米軍人プログラム・イベントに参加する機会をいただき、有難うございます。新しく着任された富田大使、秋元会長、そして「トモダチ作戦」の司令官としてご尽力いただいたウォルシュ提督にも久しぶりにお会いでき、感謝とともに、大変嬉しく思います。

近年の日本にとって最大の国家的危機であり、多くの犠牲者を生じた東日本大震災が発生してから10年が経ちました。この大震災に際して、震災直後から支援いただいた、米国政府、米国民の皆さん、そして当時のルース大使をはじめとする在日米国大使館の皆さん、「トモダチ作戦」の現場で活動してくれた多くの米軍の友人の皆さんに、改めて感謝します。

現在の被災地では、復興も進んでいるものの、本来の姿に戻るには、福島第一原発の廃炉問題をはじめ、いまだに多くの課題を抱えています。先月13日には、福島を中心として、東日本大震災の余震といわれる震度

6強の地震があり、150名以上の負傷者が出ました。大きな地震は、被災地はもちろん、ほとんどの国民にとってまだまだ当時を思い起こすトラウマとなっています。

東日本大震災は、地震・津波被害と福島第一原発事故の複合災害となり、防衛省にとっても、現場で活動した自衛隊はもちろんですが、防衛大臣をはじめとした総力戦となりました。自衛隊にとっては、最大10.7万人という派遣規模はもちろん、活動内容の多様性・厳しさ、初めての放射線下の活動、米軍との共同対処等の観点からも創隊以来最大の作戦となりました。被災地では、自衛隊の災害派遣では初めて統合任務部隊を編成して対応しました。運用に関して陸海空自衛隊を取りまとめて、一元的に防衛大臣を補佐する組織となった統幕も、創設以来まだ5年目でした。それまでは実際的な統合運用という観点からは、北朝鮮の弾道ミサイル対処のための経験しかありませんでした。

その様な中で、発災後、米軍は空母ロナルド・レーガン等からなる最大1.6万人が参加した「トモダチ作戦」を速やかに展開し、被災者目線で心のこもった支援をしてくれました。我々も米国の素早い決断と、米軍の機動力には非常に驚きました。発災後もう2日後には、空母ロナルド・レーガンをはじめとする米軍が被災地沖まで進出してくれました。この動きは、その後の米軍の活動も含めて、周辺各国に対して、日米同盟の強固さを示すことにもなりました。24日以降は、日本で起きた震災のために、米軍として初めての統合支援部隊(JSF)を編成して対処してもらいました。もちろん指揮官はウォルシュ提督です。提督からは、日本政府、そして自衛隊に対する「支援」ということを主軸に、心細やかにサポートしていただいたことに心から感謝しています。

「トモダチ作戦」は自衛隊と米軍の絆の強さの表れです。それは、今日もオンラインで視聴されている、日本で自衛隊と一緒に勤務されたことのある多くの軍人の皆様はじめ、長年の日米共同訓練や指揮官同士、あるいは幕僚間の対話や交流を通して、相互の信頼感が生まれ、繋がっ

ていることが大きな要因だと思います。私自身も、フィールド中将はじめ歴代の在日米軍司令官とは頻繁な会合を重ねていましたし、太平洋軍司令官のウィラード提督とも機会を求めて日本やハワイで戦略協議などを行っていました。もちろん、マレン統合参謀本部議長ともです。いわゆる「気心の知れた仲」という、親密な人と人との関係の大切さであり、それが、日米同盟を支えている大きな要素であることを改めて認識しました。

大きな部隊が作戦を始めると、情報共有と共同対応のために、相互調整が極めて重要になります。日米間の調整については、発災当日深夜には早速、統幕に横田から連絡幹部が派遣され、在日米軍司令部を介して、在日米陸・海・空・海兵隊の各軍と自衛隊との調整がはじまりました。24日のJSF立ち上げ後は、市ヶ谷の統幕と横田の在日米軍司令部、そして仙台の東北方面総監部に日米調整所を設置して、活動に関する緊密な調整を行いました。この日米調整所を視察した、防衛大臣はじめ日本の高官は、日米軍人がなんの違和感もなく、当たり前のようにお互いに調整を行っている様子を見て、自衛隊と米軍の緊密さが強く印象に残ったようです。

震災から4年後の2015年には「日米ガイドライン」協議において、日米の「同盟調整メカニズム」が改正され、平時から継続的に政策・運用面での調整が強化されることとなりました。また、大規模災害への対処における協力や米軍の災害訓練への参加がうたわれました。それらの結果として、2016年の九州・熊本地震、2016、2017年の頻繁な北朝鮮の弾道ミサイル発射、現在に至る尖閣諸島における中国の執拗な活動などについて、「同盟調整メカニズム」を活用しながら緊密な連携がとられています。

「トモダチ作戦」の活動について少し述べてみます。発災直後から、被災地での生活支援、学校、鉄道などの復旧支援、そして仙台空港の早期復旧のために、陸・海・空・海兵隊の能力を存分に発揮してもら

いました。実は、私の本音で言えば、米軍が日本の実際の被災者の中で活動するのは初めてであり、そのかわり方も含めて心配していたことも事実ですが、それは全く杞憂に終わりました。「トモダチ作戦」の現場においては、米軍人の皆さんが被災者の立場、日本人の目線で一緒に生活支援や復旧活動をしてくださいました。米軍に対する被災者の感謝と信頼の気持ちは、残された多くの記録写真に現れています。その中にある、特に子供や老人の目を見ればよく理解できることです。

ウォルシュ提督にも、ルース大使やウィラード太平洋軍司令官とともに、学校などの避難所の被災者を激励していただきました。ウォルシュ提督には、整然とした避難所や、予想もしていなかった被災者からのお礼の拍手など、被災者の規律心や心の豊かさをほめていただきました。そして、「トモダチ作戦」に参加したことは、米軍にとっても意義あった、というコメントをいただいたことは、私にとっても、日本人としてうれしいことでした。

福島原発対応においては、米国政府そして米軍から、原子炉等に関する様々な専門的知見等を政府、関係省庁、自衛隊に提供してもらいました。自衛隊は原子力空母も、原子力潜水艦も保有していないため、原発に関する知見が限定される中で、米軍専門家の知見に加え、例えばグローバルホークやモニタリング装置運用、そしてワシントンから派遣された CBIRF の支援等は大きな助けでした。

その一方で、福島原発の情報共有問題を主として、震災直後から日米の合同調整会同が立ち上がるまでの約 10 日間は、日米両政府間で、深刻な事態を招いていました。一部では、日米同盟の危機とまで言われました。この状況の中で、日米の絆をつなぎとめ、強固にしていたのが自衛隊と米軍であり、また両国の外交・防衛関係者の努力だったと理解しています。これには在日米軍の存在も大きなものがありました。今後、日米両政府が共同して対処すべき事態に直面したとき、福島原発事故は大きな教訓を与えてくれます。

震災対応を行いつつ、日本周辺の他国軍の動きも気がかりでした。

東日本大震災への対応の裏では、東シナ海においては海自護衛艦に対する中国公船からのヘリや小型機による異常接近や、ロシアの電子偵察機や戦闘機の活発な活動があり、自衛隊にとっては、災害派遣の10万人態勢はこれらを予期していたものとはいえ、警戒監視活動の強化を余儀なくされました。限られた自衛隊の勢力に加え、米軍が「トモダチ作戦」を遂行しつつ、東アジア全般の警戒監視活動を遂行していることは力強い限りでした。

最後に、在日米軍司令官のフィールド空軍中将のエピソードをお話しさせていただきます。3月12日以降、福島原発も状況がだんだん悪くなり、在日米国民の自主避難が始まる中で、彼は女性の通訳に言いました。「君と僕は日本を離れる最後の米国人だ。横田の司令部がだめになったら、影響のない名古屋に司令部を移して最後まで活動する」と話されたら、後日聞きました。ここまでの覚悟で日本を支援してくれたフィールド中将の強い思いと、ウォルシュ大将が指揮された米軍に、当時の統幕長として、一人の軍人として改めて感謝したいと思います。

米国政府と米軍の支援は、日米同盟を体現した、本当の意味の「トモダチ作戦」でした。「トモダチ作戦」に関わった多くの将兵、関係者の皆さんに、心から感謝しています。有難うございました。